

連載 **モリテツの**
東アフリカ
大陸に行く!

18 野性の魅力たっぷり
チョベ・サファリ



ボツワナ・チョベ国立公園のポート・サファリは最高だ。転覆すれば、その場でワニの餌食になるかもしれないだろうが、そんなことを忘れさせるほど、次々に動物や野鳥が現れる。野鳥も原色ばかりの美しさで、日本の鳥とはまるで違う雰囲気がある。



陸地で珍しいカバの群れ

200mほど先の水辺に、何かが群れている。「なんだ、なんだ」とJICAの若者も興味津々。近くくと、カバの群れだった(写真①)。砂地で赤ちゃんもまじって、家族団らんだ。「Oh!カバを陸地で見られるなんて、なんて君たちはラッキーなんだ」とガイド氏。その沖合を見ると、ザンベジの大河で、大カバが大あくび?(写真②)



川の真ん中であくび?

「子象がいる時の親象は恐いんだぜ」などと言いつつながらポートを

午後(は、ジープに乗り換えて、陸地をサファリ。最初に現れたのは、麒麟の群れだった(写真⑤)。原野に悠然とした立ち姿は優雅である。

そこを少し進むと、おお、今度は象の家族たちだ。ポートがぐんぐん近づくと(写真③)。「子象がいる時の親象は恐いんだぜ」などと言いつつながらポートを



ボートのすぐ近くに象の群れ

りぎりまで接近させた。巨大な象が鼻を振りあげて、こっちに近づいた。「ウエツ。すげえな」とのけぞる。迫力一杯である。



ものすごい数の象の群れ



草原には麒麟の群れ

4、5家族はいるのではないか。子象たちが水辺でじゃれ合っている(写真④)。それからロツジに戻って昼食。これがまた豪華なランチで、ジュースも果物もフリー。物価には厳しい小生も、これで「100ドルは安い」と納得だ。



休息していたこの野牛が猛然と襲ってきた!

木立の中にデコボコ道が続く。木陰に野牛が群れている。野牛は最も恐い動物の一種だ、とガイド氏が出た時、後ろの方で「ガーン」というものすごい音がした。ジープが反転しそうになった。野牛が後ろからジープに体当たりした

森哲志(もりてつし)/ジャーナリスト。日本エッセイストクラブ会員。朝日カルチャーセンター講師(エッセイ担当)。朝日新聞社社会部記者歴40年。著書に『男は遍路に立ち向かえ』(09年長崎出版)、『団塊諸君一人旅はいいぞ!』(朝日新聞社)、『不屈のプレイボール』(河出書房新社、ミスノスポーツライター賞)など。東日本大震災1ヶ月後から津波被災地に入り、取材。この11月18日に、震災支援の一冊『あの人に あの歌を—三陸大津波物語』として出版。http://mori-tetsu.o.o07.jp/



サファリの雰囲気よりも生活の匂いがあるザンベジ川の船着き場

休んでいた一頭(写真⑥)が、何を思ったか猛然と襲ったらしい。「ウエ」と胸をなでおろした。ほぼ6時間近いサファリを楽しんで、再びザンベジ川の国境(写真⑦)を渡って、ボツワナからザンビア・リビングストーンへ。いや、サファリなん

らしい。ドライバーが立て直して転覆することはなかったが、乗っていた西洋人客は悲鳴の連続。木陰でのんびり休んでいた一頭(写真⑥)が、何を思ったか猛然と襲ったらしい。「ウエ」と胸をなでおろした。



サファリの雰囲気よりも生活の匂いがあるザンベジ川の船着き場